

## A. N. ラジーシチェフの「祖国の真の息子」論

佐々木 弘 明\*

A. N. Radishchev's views of  
"The true son of the nation"

Hiroaki SASAKI

### I

アレクサンドル・ニコラエビ、チ・ラジーシチェフ（1749～1802）は、農奴制と専制政治のもとに苦しむロシアの現実社会を赤裸々に摘発した著書『モスクワからペテルブルグへの旅』（1790年）によって女帝エカテリーナ二世（在位 1762～96）の怒りをかい、彼は宮廷と貴族階級を震撼させたロシア最大の農民暴動（プガチョフの乱 1773～75）の指導者エメリアン・プガチョフをもしのぐ反逆者として死刑を宣告され、たがすぐ後で女帝の慈悲によりシベリアに10年の流刑に減刑された。パーヴェル一世（在位 1796～1801）の即位とともにその罪を許され、アレクサンドル一世（在位 1801～25）の治世下で法典編纂委員に加えられたが、間もなく服毒自殺をとげその不幸な生涯を終えた。

発禁処分を受けた『モスクワからペテルブルグへの旅』は、1858年になってア・イ・ゲルツェンによってロンドンで再版された。ロシアではラジーシチェフの息子ベ・ア・ラジーシチェフが1860年代に出版を試みたが成功せず、その出版は1905年の第一次ロシア革命後であった。『モスクワからペテルブルグへの旅』以外の著作はラジーシチェフの死後の1809年に出版されたが、政府はラジーシチェフの名を抹殺することに務めた。作家ア・エス・プーシキンが、「ロシア文学についての論文のなかでどうしてラジーシチェフの名を忘れられるだろうか？」<sup>1)</sup>と1836年に論文『アレクサンドル・ラジーシチェフ』を雑誌『同時代人』に掲載しようとしたが、「完全に忘れ去られ、また忘却に値する作家や著作についての記憶を復活させるのは、不都合であり、まったく余計なことである」と文部大臣エス・エス・ウヴァーロフによって禁止された<sup>2)</sup>。尤もプーシキンは、上記の論文では、検閲を通すためはかなり気をつかったとはいえ、ラジーシチェフについて「我々は彼のなかに、並々ならざる精神を持った犯罪者の存在を認めないわけにはいかない。疑いもなく思い誤った政治的狂信者である。驚くべき自己犠牲と一種の騎士道的良心をもって行動したのである。……彼は自分の苦い毒舌で至高の権力をいらだたせたようにみえる。自分が生み出し得る善を指し示すことの方がよかったのではないか？ 彼は地主たちの権力が明ら

\* 教育学教室 (Dept. of Educatlen)

かな不法行為であるといいたす。政府と賢明なる地主に、漸次的改良の方法を提示したほうがよかったのではないか？」<sup>8)</sup>と、むしろ批判的な論調で書いている。

ラジーシチェフの研究は19世紀の末に本格的に始まり、その傾向は反逆者あるいは革命家としてより、「漸次的改良」を目指したリベラリストとして評価しているものが多い。それは『ペテルブルクからモスクワへの旅』の中で夢の中の話としてツァーリが目覚めを求めている「スパスカヤ・ポーレスチ」の章、ツァーリが地主・貴族に農奴の解放を説得することを求めている「ホチーロフ——未来の計画」の章、そして良きツァーリが貴族の権利を縮小して権力と自由を如何に結びつけられるかを追い求める「ヴィドロプースク——未来の計画」3つの章にみられる啓蒙主義的ツァーリへの期待の叙述にもっぱら依っていることによる<sup>9)</sup>。

こうした見解にたいしてゲ・ヴェ・プレハーノフは『ロシア社会思想史』の中で「ラジーシチェフの世界観は、我々の時代の先進的人々とは同じものではなかったとはいえ、……しかし彼らと近似性の蜂蠟でしっかりと結び合わさっている<sup>10)</sup>」と述べ、ヴェ・イ・レーニンは「我々の美しき祖国に、どれほど多くの強制、迫害、そして愚弄を、ツァーリの刑吏どもが、貴族どもが、さらには資本家どもが、蒙らせてきたがかを見そして感じるのである。これらの強制が我々の仲間、すなわち大ロシア人の仲間からの抵抗を呼び起こしたこと、この仲間がラジーシチェフ、デカブリストたち、1870年代の革命的民主主義者たち——雑階級人たち、を前進させたこと、大ロシアの労働者階級が1905年に強大な革命政党を作り出したこと、大ロシアの農民たちが同時に民主主義者となることを始め、僧侶や地主どもを引きずり落とすことを始めたこと、に誇りを感じている<sup>11)</sup>」とラジーシチェフにロシア革命思想の始まりをおいた。亡命ロシア人思想家ニコライ・ベルジャエフもまた『ロシア思想史』の中で「ラジーシチェフは18世紀のロシアにおいて最も注目すべき人間であった。……彼の心は農奴制の不正によって痛ましいばかりに傷つけられた。彼はこの不正を暴露した最初の人であり、……ロシア・インテリゲンチヤの急進的革命的傾向の最初の父親とみなされてよい<sup>12)</sup>」と革命思想家としての位置づけをしている。

ソヴェート政権のもとでラジーシチェフをロシアにおける最初の革命家とする評価が定着し、リベラリストとしての評価は、ラジーシチェフを曲解するものとして、今日では誤りとされている。しかしそれでもラジーシチェフ見解に見られるリベラルな側面をめぐっては1955～58年に行なわれた論争では決着がついていない<sup>13)</sup>。

『ソ連邦の哲学史』(1969)では「ラジーシチェフは、ロシア社会思想史において、初めて、専制・農奴制システムの廃止そしてそれを人間の自由と平等に基づいた社会にとって代える道として、農民革命の思想を提起した<sup>14)</sup>」としているが、これを現代のラジーシチェフ評価の基本とみなすことが出来るであろう。ラジーシチェフの革命家としての評価は教育史的には、当然ながら専制・農奴制の廃絶のために闘う戦士の育成を呼び掛けたことにある。エム・カリーニンは1945年にラジーシチェフが「革命的モラルの最初の萌芽」を与え、彼の「教育についての思想は今日でもなお進歩的なものとみなしうる<sup>15)</sup>」、イェ・メジンスキーは1952年にラジーシチェフは「祖国を愛し、奴隷制度をにくみ、自由のために敢然と闘う用意のある〈祖国の誠実な子〉を教育しなければならない<sup>16)</sup>」とし

たと評価している。こうした見解は、1973年の『ソ連邦の学校史と教育思想概論——18世紀から19世紀』においても基本的には同じで、その中でエヌ・トルーシンは「貴族的—農奴的教育の欠陥と悪徳を根絶するためには、現存の社会機構を変えること、つまり専制主義を覆して農奴制を廃止することが必要である。ロシアの社会的諸関係の革命的再編成の必要性を深く認識して、ラジーシチェフは専制主義—農奴制的秩序と闘う戦士を育成することが不可欠であるとみなした。こうした新しい認識から、彼は〈祖国の真の息子〉という教育の目的と課題の決定に到達した」<sup>12)</sup>と論じている。革命に向かって闘う戦士、つまり「祖国の真の息子」を育成することがラジーシチェフの教育目的であったとしている。

さて、「祖国の真の息子」という言葉は、『モスクワからペテルブルクへの旅』で用いられている言葉であるが、それを論じているのがその一年前の論文『祖国の息子とは何かについての対話』(1789)である。「祖国の息子」という言葉は、1783年にエカテリーナ二世が国家に忠良なる「祖国の息子」の形成を目的にエフ・ヤンコヴィチに命じて作成させたといわれる『人間と市民について、エカテリーナ二世女王陛下の大いなる思召しによる国民都市学校において精読すべき書』(通称『市民と人間の義務』)以来よく使われていた。ラジーシチェフと同様、国事犯として投獄された社会啓蒙活動家エヌ・ノヴィコフは『市民と人間の義務』の出版に合わせていくつかの教育論文を書き、エカテリーナの「祖国の息子」にたいして「社会に有用なる市民」の形成を主張した。ノヴィコフは、出版活動家として知られ、多くの風刺雑誌の中でロシアの農奴制社会を痛烈に非難するとともにエカテリーナを風刺し、国民学校の設立や社会啓蒙活動に努め、エカテリーナの国家のイニシアチブによる教育の普及に対立して社会(個人や団体)による教育の普及そして人間理性の教化による社会の改革の可能性を求めようとしたが、彼はまさに啓蒙君主を自認したエカテリーナの時代的申し子であり、エカテリーナ治世の矛盾の正視から彼の中にはもはや啓蒙君主への期待は見られない<sup>13)</sup>。ノヴィコフの「市民」は「真の人間」を意味していたが、じつはラジーシチェフも「祖国の息子」に同じ意味を持たせている。ラジーシチェフは『祖国の息子とは何かについての対話』において「真の人間と祖国の息子とはまったく同一である。」<sup>14)</sup>と述べている。ノヴィコフは革命的社會変革を主張しなかったことにその思想的限界が指摘されてきた。ラジーシチェフについては、「彼は、〈祖国の子〉——革命家であり、〈善良なひらけた君主〉を信じない人間の教育について、独自の命題を提起し、…教育によって〈社会を改造する〉ことができるという……理想主義的命題に反対」<sup>15)</sup>し、革命による社会の改造を呼び掛けたことに時代をこえた先見と進歩性が指摘されてきた。

それでは果たして、ラジーシチェフの「祖国の息子」は革命の担い手そのものであったであろうか、「真の人間」はノヴィコフの意味とまったく異なっていたであろうか、『モスクワからペテルブルクへの旅』の上記の三つの章にみられる目覚めた啓蒙君主への期待はエカテリーナへの鋭い嘲笑と解して彼の革命的思想の一貫性が認められるであろうか。これが本稿で究明を試みようとしていることがらである。

## II

ラジーシチェフは、1749年モスクワで中流貴族の家庭に生まれ、その幼年時代を父親の

サラトフの領地で過ごし、そこで乳母と守役に読み書きの手ほどきを受けたのち、1756年にモスクワの伯父の家でその子供たちとともにモスクワ大学の教授たちの指導の下にギムナジヤの課程を終え、伯父の口添えで宮廷侍従に加えられ、ペテルブルクの貴族幼年学校生徒として学ぶとともにエカテリーナ二世の宮廷で勤務を遂行した。

1767年(17才)にラジーシチェフは、女帝の命により選ばれた12名の侍従の一人としてドイツのライプツヒ大学への留学に旅立ち、1771年に帰国したが、この4年間にわたる留學生活は彼の思想形成に大きな影響を与えた。尤も、彼の思想形成を考える場合、彼が農村(領地)で幼年時代を過ごしたことも見逃せない。彼の乳母も守役も農奴——僕婢であり、身近に農民たちの暮らしぶりを見たり、また農民たちの歌う民謡の中にこめられた彼らの苦しみや悲しみを聞いたこと、さらに「生まれつき感じやすい心を持っていた」という彼の性格そのもの、等が彼のなかに農民への同情や彼らの勤勉さや賢明さの理解を自然に育んでいったであろうことは推測できる。

留学にあたってエカテリーナは学生たちに、「全員が……とりわけ自然法、国民一般法ならびにローマ法を、……学ぶ」ことを命じ、彼らに法律学を学ぶことがその目的であることを訓令した。学生たちはそれ以外に、道德哲学、歴史、ドイツ語、フランス語、ラテン語、その他の科学を学ぶことを義務づけられた<sup>16)</sup>。学生たちは、法学部に籍を置いたが、最年長のフォードル・ウシャコフ(20才)以外はドイツ語の講義についていけなかったので、ヴィツマンという若い教師の下でドイツ語の学習から始めた。

学生たちの監督者として陸軍少佐エ・エフ・ボクーニンと修道司祭パーヴェルが一緒であった。ところがボクーニンは「粗野で、無教養かつ傲慢な」人柄で学生たちを自分に隷属させ<sup>17)</sup>、それに加えて留學生の給与を着服したため、学生たちはきわめて不自由な貧しい生活を余儀なくされ、絶えず両者は対立し、学生たちはヴァツマンにエカテリーナに実状を報告することを委託する事件が起こったりした。ラジーシチェフはその頃の様子をのちに「我々は、ただ堪え難い<sup>くびき</sup>軛から自由になる方法について考えることから始め、学習について思いを馳せることどころではなかった<sup>18)</sup>」と書いている。

こうした生活条件の悪さにもかかわらず、学生たちの勉学は続けられ、ザクセンのロシア公使は彼らの勉学ぶりについて1768年に「彼らが短期間のうちに著しい進歩を示し、知識においてもっと以前から学んでいる者たちに引けをとらないほどであることを誰もが一樣に驚きを持って認めております。特につぎの者たちが称賛され、その進歩を注目されております。まず第一は年長のウシャコフで、続いてはヤーノフとラジーシチェフです。彼らは自分の教師たちの期待をはるかに上回っております」と報告している<sup>19)</sup>。法律学として学生たちは、自然法の講義から入った。自然法については、1764年にヴェ・テ・ゾロトニツキーによる『自然法の要約』がペテルブルクで出版されており、ラジーシチェフもそれを読んでいた。この本には「全ての人間は自然状態においてお互いに平等であり、誰も他人にたいして権力を有していない。したがって誰もが生まれつき他人から自由である」と自然権が説明されているが、作者は、自由の思想を鼓吹しようとしたのではなく、むしろ人間が自分たちの安全のために社会的契約としてツァーリに権力を移譲したのであり、従ってその意志に絶対的に従わなければならないとする論を展開した<sup>20)</sup>。ライプツヒ

ヒの大学の講義も基本的にはこれと同じであった。ラジーンチェフは真白面に講義を受けたが、ルソーの『社会契約論』のほうが彼を引き付けた。

学生たちの人気があったのは、ゲーテも講義を聞いたといわれる詩人で著名なクリスチャン・ゲレルトであって、彼は修辞学（作詩法も含む）と道徳哲学を講義した。学生たちに嫌われたのが国民一般法を講義したベーメであった。ラジーンチェフたちはこの講義への出席を拒否してこの時間にド・マブリの『ヨーロッパ公法』を読んでいたといわれる。彼は定められた講義以外に生理学や医学なども聴講した<sup>21)</sup>。

ウシャコフの才能と学問への意欲は他を圧倒しており、彼は学友たちに読書会を組織して熱心に指導した。そこでラジーンチェフはフランスの唯物論者たち、とりわけエルヴェシウスを知り、ラテン語の学習を通じて古代国家の政体に精通する、など多くのことを学び、彼の世界観の基本理念はここで形成されたといっても過言ではない。ウシャコフは、1770年に23才の若さでこの地で病気の苦しみのあまり自殺を遂げてしまう。彼の遺稿をラジーンチェフは1789年に自分の論文『フォードル・ヴァシーリヴィチ・ウシャコフの生涯』の末尾につけて出版した。ウシャコフの遺稿のうち五つの書簡の形をとったエッセイはエルヴェシウスの『精神論』に関するもので、それは「ほとんど最初の理解ある批判」であると評価されている<sup>22)</sup>。

ラジーンチェフたちが留学した1767年にエカテリーナ女帝は新法典編纂委員会を召集するとともに新法典は法律の下で国内を理性と正義で支配するという政治理念をうたった有名な『訓令』を示したが、この『訓令』は女帝の啓蒙君主ぶりを誇示するためにラテン語、ドイツ語、フランス語に翻訳され、ライプツヒでは1770年に出版された。従ってラジーンチェフはこの年に『訓令』を読んでいたと思われる。彼は『訓令』の「自由とは法が許すものすべてを為す権利である。」（第38条）を『ペテルブルクからモスクワへの旅』のなかで「すべてが法に一樣に従うことを自由と名づけなければならないと<sup>23)</sup>」解しており、ここには法の前に平等と同時に自由が示され、彼の解放プログラムの重要な点のひとつとなっている。周知のように、エカテリーナは、プガチョフの乱以後に、啓蒙君主としての装いを棄て専制主義の強化をはかり、貴族を特権者とするとともに農民・農奴を貴族の私有財産として完全に彼らに奴隷属させ、またアメリカ独立戦争、さらにフランス革命への流れの中で、反政府活動や革命思想への抑圧を強めていった。ラジーンチェフはこのようなロシアの現実社会の中であって『ペテルブルクからモスクワへの旅』の著作にいたり、貴族や地主の専横ぶりを非難し専制主義体制の廃止を求めるが、そのことは必ずしもエカテリーナ女帝そのものの非難あるいはその政府自体の打倒を叫んでいるとは言えず、むしろ彼は一般論として人間による人間の奴隷化の否定、専制主義の廃止、法の前での平等と自由を呼び掛けたのではないかと思われる。そこから考えると、プーシキンが「しかしおそらく、ラジーンチェフ自身、自分の狂気の迷妄の重要性のすべてを理解していなかったのである。そうでなければ彼ののんきさや、知っている人々すべてに自分の本を送るという奇妙な思いつきをどうやって説明できるのであろうか。送りどけた中にはデルジャーヴィンもいて、そのためデルジャーヴィンも苦境におちいったのである<sup>24)</sup>」と、ラジーンチェフは彼の本が女帝の怒りをかうものであるとは考えていなかったと指摘している

ことも理解できる。

1771年に帰国すると、ラジーシチェフは、元老院に勤務を命じられ、1773年からはペテルブルクの総指令官陸軍大将ブリュースの参謀付きの主任法務官となるが、1775年にプガチョフの乱の鎮圧後に退職している。その理由がプガチョフの乱と直接関係していたかどうかは不明であるが、この農民暴動がロシアの宮廷はもとより貴族階層を震撼させ、有識者たちの世界観に大きな影響を与えた大事件であったことから推して、彼の退職理由にもなんらかの関わりがあったと考えるべきであろう。ちなみに彼は退職時大尉であった。彼は、1777年に商務省に陪席判事として再び勤務につき、1780年からは流刑後も彼の理解者で支えとなった伯爵ヴォロンツォフの信頼を得て税関吏としての職務に従事していた。いわば官吏としての彼の将来は約束されていたのであった。

ラジーシチェフはライプツヒにおいてすでに文筆活動を始めており、詩人あるいは作家として立つつもりであったと考えられる。帰国前に彼は、ロシアが当時ギリシャの独立擁護を名目にトルコとの戦争中であったこともあって、ギリシャの解放を訴えた小冊子『キリスト教徒ヨーロッパへのギリシャ人の呼び掛け』を翻訳して『聖・ペテルブルク報知』誌へ送って掲載してもらおうとしたが、この冊子はすでに掲載されていた。帰国後彼はペテルブルクの「外国書籍のロシア語翻訳を促進する会」(1768年設立)に入り、マヴリの翻訳を請け負った。それが『ギリシャ史考』であった。出版は1773年にノヴィコフの「書籍出版促進協会」(1772年設立)によって行なわれた。この翻訳が彼のデビュー作といえる。彼はこの本につけた註で、「専制」の項について「専制は人間の本性に最も相反する状態である」とした上で、君主は「国民の社会の第一の市民」にすぎず、従って「君主の違法は、国民に、つまり彼の裁判官に、罪人にたいして法が為すのと同じまたそれ以上の権利を与える」と書いた<sup>25)</sup>。この項は、ラジーシチェフが「国民のツァーリを裁く権利を宣言した革命的思想を述べた<sup>26)</sup>」ものとして評価されているところである。しかしこれはラジーシチェフ独自のものであったかどうかは疑わしい。彼がなぜマブリを翻訳したかである。彼がライプツヒで読んだ『ヨーロッパ公法』(1746)はマブリが国際関係法の権威となった主著で、『ギリシャ史考』(1766)は彼が当時入手できた最新作であるが、この間に出版されたマブリの主な著書に『ローマ人考』(1751)、『ファッション対談、道徳と政治の関係について』(1763)と『フランス史』(1765)を読んでいないとは考えにくい。マブリは「人間は生まれながらにして平等であり、食欲が人間を貧者と富者におけるものであり、私有財産こそ一切の罪惡の源であると考え、君主制に反対し、主権を人民の代表者に集中すること、私有財産制を廃止すること、財産の共有と人間の平等こそ理想的な制度であることを主張した。また戦争に反対し、愛国心と市民の自由を結合させ、道徳と政治は人間の幸福に従属すべきものであり、歴史の任務は道徳と政治の学校となるべきものと考えた」と説明されている<sup>27)</sup>。『ギリシャ史考』は道徳と政治の学校として古代ギリシャの都市国家を描いたもので、特にマブリは政治家としてリュクルゴスが好きで「彼はいわば市民の心の底までおりていった<sup>28)</sup>」と書いている。マブリは法によって人間の幸福と社会の繁栄をはかろうとする道徳原理を基本に置き、従って法が不合理ならそれに従わない権利、その廃止を求める権利を有し、国民の現状を変える権利、つまりは革命の機利も

認められるとする。こうしたマブリの思想にラジーシチェフが相当の影響を受けたと見るのが自然であろう。もちろんエルヴェシウスからの影響も同様に大きかったと思われる。だがラジーシチェフの政治・社会観の枠組みあるいは下地にマブリがあったと思える。そしてそれはプガチョフの乱以後のロシアの現実の中で彼なりの修正がなされていったと思われるのである。

ラジーシチェフは公務のかたわら文筆活動を続け、ノヴィコフの出版協会やフォンヴィジーンなどの作家との交際、またフリーメースンとの関わりも見られるが、作家としての彼の名はなかった。彼は『ロモノーソフについての話』を1789年に、頌詩『自由』を1781～3年に書いているがこれらは『モスクワからペテルブルクへの旅』(1890)の中に掲載された。彼は1789年になって『フォードル・ヴァシーリヴィチ・ウジャコフの生涯』を科学アカデミーの付属の帝室印刷所から匿名で発行することが出来た。当時ペテルブルクには作家や有識者の集まりである「言葉の科学友好協会」があったが、そこから1789年に月刊誌『話し合う市民』が発行されることになり、会員であったラジーシチェフは『祖国の息子とは何かについての対談』を匿名で掲載した。その後自宅に印刷所を設けて、そこから1790年に『職務遂行のためにトボリスクに住む友人への書簡』そして『モスクワからペテルブルクへの旅』をいずれも匿名で出版したのである。

『モスクワからペテルブルクへの旅』はまもなくエカテリーナの手もとに届けられ、彼女は詳細に目を通したうえでその著者の探索を命じた。出版の一月後にはラジーシチェフは逮捕され、ヴォロンツァフの弁護の甲斐もなく、審問の結果有罪とされた。この本を読んだ高官は、「この本には、地主を殺害した農民の弁護や、自由・平等の御託宣が充ちあふれている。これは地主にたいする反抗とお上にたいする謀反を扇動するものだ」とか「革命の勃発を呼び掛ける合図の鐘」であり「ミラボーとその一派の狂気じみたフランス人ども」の調子に充ち満ちているといった評価を与えたように、貴族政府に大きな衝撃を与えた<sup>29)</sup>。エカテリーナは「彼はマルティニストです。彼はプガチョフよりも悪い。フランクリンを誉め称えている」と側近に語ったといわれる。このマルティニストというのはフランスのフリーメースン一派に影響を与えた神秘主義派でロシアにも影響を与え、革命の陰謀を企てているという噂がありエカテリーナが最も危険視し嫌悪していた。ラジーシチェフはマルティニストではなかったがその嫌疑が有罪の最も大きな決め手であったと思われる。さらにフランクリンをほめていることが女帝の怒りを大きくした。フランクリンはアメリカの独立戦争でフランスとロシアの援助を取りつけその勝利へ大きく貢献したが、女帝は彼を「反徒」と呼びアメリカへの援助を拒否するつもりだったといわれる<sup>30)</sup>。しかし成り行から「貿易の自由」を守るために「中立」を宣言して結果的にアメリカの独立を助けることになった。またパリでフランクリンにフォンヴィジーンが会ったり、フランクリンの著書が翻訳されるなどその思想的影響も少なくなかった。女帝にとってフランクリンは革命の扇動者にほかならなかつた。こうした点から見るとラジーシチェフの断罪は、『モスクワからペテルブルクへの旅』の内容の持つ革命的な性格それ自体によるというよりも、むしろそれを口実にして、革命的動きにたいする見せしめのためではなかったと思われる。そうでなければたった一冊でいばば無名の作家を処罰したとは考えにくい。

ラジーンチェフはシベリヤのイルムーツクに流刑となり1796年までその地で過ごしたが、その間に彼の最も長い哲学論文『人間論、その生と死について』(1792~96)を書き上げた。1801年にアサクサンドル一世によって完全に自由を回復してから、いくつかの改革案のほか詩の創作も行なっている。

### III

「人間は生まれながらにすべてにおいて自由である」<sup>81)</sup>、これがラジーンチェフの思想の出発点である。「自由」な存在としての人間は当然「平等」な存在でもある。すなわち、「人間はあらゆる点で他の者と平等な者としてこの世に生まれてあるのです。我々はみな同じような手足を持ち、誰でも理性や意志を持っています。それ故に社会にたいする関係を持たない人間は自己の行動においてなにもの拘束も受けない存在<sup>82)</sup>」である。しかしこの人間の持つ自然権は、「人間は社会的生活をするために生まれついて<sup>83)</sup>」いるので、「彼はそれに制限をもうけ」、「彼はあらゆる事で、自分の意志だけに従うのでは」ではなく、「自分と同じ人間の命令に服する」ようになる、つまりは「市民」となるのである<sup>84)</sup>。ここから「市民法」の必要性が必然的に生まれてくる。「市民法」は人間各人が「生まれながらに」持つ「無拘束の自由」を「互いに等しく」「制限する」ものであり、従って「社会における第一の主権者は、法律である。何となれば、法律はすべての者にとって唯一のものであるからである<sup>85)</sup>」とする。法の前における人間の自由と平等の保障によって、個人と社会全体の「福祉」がもたらされるのである。

しかしながら現実には人間が人間を奴隷化し、不平等が支配している。ラジーンチェフは、ロシアには農奴制が存在し、農民たちは人間としての権利を奪われ、家畜同然の悲惨な生活を強いられていると、農民たちの苦しみと地主貴族たちの専横ぶりを告発する。

『ペテルブルクからモスクワへの旅』の中で、農民との会話のかたちで「——お前、一週間で働く時間を持っていないというのか? ……——一週間には六日しかないんですよ。旦那。わたしたちは一週間のうち六日ぜんぶ賦役に出るんですよ。日が暮れても、天気によければ森に残った枯草を御主人の屋敷に運ぶんですよ。その上女や娘どもは日曜日ごとに森に葎や木の実をとりに行かされるんですよ」「羊も布も、めんどりもバターもみんな取り上げてしまいますんですよ。御主人が年貢で取って、ことに管理人を使わないでとここでは、百姓も楽なほうですよ。もっとも、親切な御主人になると一人あたり三ルーブルも取り立てることもあるんですが、それでも賦役よりはいいですよ。この頃では地を賃貸しに出すことが流行っており、わしらはこれを命を貸し出すと呼んでいるんですよ。露骨な賃借人は百姓の生皮をはぎとり、その上わたしの時間までもみんな取り上げてしまうんですよ。……奴のためにひたすら働けというわけです。自分とこの百姓をよその者に貸して働かせるなんて悪魔のような思いつきですよ<sup>86)</sup>」と、虐げられている農民を描写し、「残忍なる心の地主たちは農民の子供たちを自分の所有物とみなしている。子供たちはほとんど裸である。なぜか? 君らは彼らの親たちを病気や不幸に陥れ、苛酷な税を課さなかったであろうか? きみたちは、その上織り上がるそばから亜麻布を自分のものとして巻き上げてしまったのではないか? <sup>87)</sup>」、また『祖国の息子とは何かについての対話』で

は、「顔つきだけは人間に似ており、その他において自分を縛りつけているの手足の枷おせの重さに苦しみもがき、幸福をもたらす一切のものを奪われ、人間のあらゆる文化遺産から排除され……彼らに許されているのは生まれ、育ち、そして死んでいくことだけなのである。……彼らが迫害者によって動かされる機械、生ける屍、牛馬以外の何物でもないとき、彼らは国家の成員でもなく、彼らは人間でもないのである！<sup>38)</sup>」と、農民にたいする「無慈悲な地主」の非人道的な不当な扱いに抗議する。

「国民の三分の二が市民たる身分を奪われて、法律において部分的に死人であるような国家を幸福であると言えようか？ ロシアにおける農民の市民的状态を幸福であると呼べるだろうか？ ひとり血に飽き足らぬ者たちだけが言う、<彼ら百姓どもは幸いだ、何故なら彼らはもっとよい状態をまったく知らないからだ><sup>39)</sup>」。このように「自分と同じ人間を奴隷にするという……残忍な慣習<sup>40)</sup>」をラジーンチェフは否定する。彼の非難の声はアメリカにも向けられる。彼はアメリカの自由の獲得のため闘ったフランクリンやワシントンに称賛の声を惜しまなかったが、アメリカの現実社会の持つ矛盾、つまり黒人を奴隷として虐げながら「国家のうわべの平穏さ」を保っていることを指摘し、奴隷制を廃止しないかぎり、ロシアと同様幸福な国とは呼べないとする。「よき秩序という重々しい標榜の杖を口実、アメリカの実り豊かな畑を彼ら（註 黒人）をこん棒と鞭で追い回し、彼らの労苦を蔑んでさえいるのである」「数百人のおごれる市民が贅沢に耽ける一方で、何千人という人々が確かな生計の手立てもなく、寒さや暑さをしのぐ隠れ家も持たない国に至福の国と呼ぶことが出来ようか？<sup>41)</sup>」

ラジーンチェフはなによりも「自分と同じ人間を奴隷にする」という人間誰しもが持つ自然の権利への不法な侵害を怒り、「無慈悲な地主たちよ、怖れよ、汝らの百姓たち一人一人の顔のうゑに汝らを弾劾する叫びを私は見る<sup>42)</sup>」と地主たちの罪を責めるが、それとともに法が地主たちの不法な所業から農民たちを守るものとなっていない現状では、農民たちは自分の自然権を強行せざるをえなくなると警告する。彼はその例として、傍若無人で農民たちを虐待し続けた地主・貴族（八等官）に忍耐しきれずまたその身を守るために思わず殴り殺してしまった農民の主殺しの事件で、農民たちの正当防衛を認めようとして貴族仲間から批判され職を辞した警察署長の話をあげている。「法律が彼を守ることが出来ないか、あるいはそれを望まない場合、または権力が目前にある不幸をみても彼にすみやかなる援助の手を差し伸べない場合には、その市民は防衛、保身、幸福のために自然の権利を行使するのです。市民は市民となったからといって人間を辞めることは出来ないからです。人間であることから生じる第一の義務は、自分自身の保全、擁護、幸福であるからです。農民に殺された八等官はその野獸的行為によって農民たちの市民権を打ち壊したのです。……自己の凶悪な支配にたいする反抗をみて、これを罰しようとしたとき——市民を守るべき法律というのははるか遠い彼方であって、その力は感じられませんでした。その時に自然の法律が復活したのです。侮辱された市民の力は成文法によって取り消されることはないのであり、ついにこの力の行使にいたったのです。凶悪な八等官を殺した百姓たちは法律に照らしても有罪とはいえません。私の良心は理性の論拠に基づいて彼らに無罪と認めます。……市民はどのような身分に生まれてこようとも、人間であり、永遠に

人間です。彼が人間であるかぎり、幸福の豊かな源泉としての自然権は彼の中で決して渴れてしまうということはないのです。市民のこの自然の侵すべからざる所有物をあえて害なおうとするものは犯罪者なのです<sup>43)</sup>」。

こうした農民の反抗をラジーシチェフは、「自然の復讐権」と呼ぶ。市民法が正当に行使されない場合、追い込まれた人間はついには自然権、つまり「自然の復讐権」を余儀なく行使することを正当とみなす。この「自然の復讐権」は国王にさえ向けられうることを、頌詩『自由』の中でクロムウェルに率いられた清教徒革命を例に上げている。「王位に立つ圧政者の血の中に、／おのが恥をそそごとと早やすべての者たちは急ぐ。……歓喜せよ鎖につながれた国民たち、／見よ、自然の復讐権が／王を断頭台に引立てたのだ」と。

「自然の復讐権」を正当化していることで、ラジーシチェフが革命を呼び掛けたことになるかというところには疑問が生じる。上の『自由』ではクロムウェルについてさらに次のように歌っている。「余は、クロムウェル、汝のうちに悪人を思う。／自身の手権に握ったことを、／汝は自由の堅き支えを打ち壊した。／しかし汝はみなに教えた、／国民に自身の復讐のやり方を。／汝はチャールズ王を裁きにかけて処刑した<sup>44)</sup>」と。ラジーシチェフは権力を握ったクロムウェルが王と同じ運命をたどったことに、「自然の復讐権」の行使という力によるだけの変革の失敗を見ている。こうした単なる力による復讐はたとえ成功してもそこには新たな社会的矛盾を生み出し、社会の秩序や安寧は保ち得ない。そこにはあるべき人間つまり市民の社会の実現はないとする。「自然の法はかくのごときである。すなわち苦しみから自由が生まれ、自由から隷属が生まれてくる<sup>45)</sup>」からである。彼にとって、「社会で侵された自然的平等と市民的平等の回復」は「市民法」によって保障されるものでなければならず、そしてそれはこの法を正しく行使しうる君主と国民の存在が第一義とならなければならない。もちろん彼は、ロシアの現実の矛盾と法の事実上の不在がさらに継続され何の改善もなされなければ、結果として、国民＝農民の「自然の復讐権」がプガチョフの乱をはるかにしのぐ規模で行使されるだろうということは当然予想しており、その意味では彼は「革命の予言者」といえるが、彼はそれを呼び掛けたのではなく、そうなることを警告し、それではそうならないためにどうすればよいかを地主・貴族そして女帝に問いかけたのである。従って彼にとって社会そして政治の問題は、すぐれて道徳の問題であり、教育の問題であって、基本的にはマブリの枠組みの中にあることには変わらない。

『モスクワからペテルブルクへの旅』の「スパスカヤ・ポラーレスチ」、「ホチーロフ」と「ヴィドロプースク」の3つの章は、彼の論理では欠かせない章である。

彼は地主・貴族たちの良心に呼び掛ける。「農民たちは今日でも我々のあいだで奴隷であり、我々は彼らのなかに我々と等しい同胞を認めておらず、彼らの内にある人間を放置している。おお、我々の愛すべき同胞たちよ！ おお、祖国の真の息子たちよ！ あなたの方の周囲をよく見よ、そしてあなたの方の過ちを認識せよ<sup>46)</sup>」と。ここで呼び掛けている「祖国の真の息子たちよ」とはいったい誰を指しているのだろうか。農民たちではない。地主・貴族たちにほかならない。ラジーシチェフは「彼らに祖国の真の息子」となることを求めているのである。彼はさらに続ける。「過ちを正せ、また冷酷さを和らげよ。

あなた方の兄弟たちを縛っている枷を壊せ、奴隷の牢獄を開け、そしてあなた方と同様に社会生活の快適さを味あわせ、あなた方と同様に彼らに物が豊かに用意されるようにせよ。彼らは、太陽の恵み深い光線をあなた方と等しく楽しんでおり、彼らにはあなた方と同じ手足や感情があり、従ってそれらを利用する権利は同一でなければならないのである<sup>47)</sup>とあるべき市民としての姿を求める。ラジーシチェフは「奴隷を物とみなしている例の見解ほど有害なものはない。一面からは傲慢さ、他面からは臆病が生まれる。ここには、強制以外には如何なる結びつきも生じえない<sup>48)</sup>」として地主・貴族たちが人間を物とみなすことは人間として許されえない行為であることを指摘するが、彼は同時に強制による農民たちにたいする奴隷的支配は彼らの勤労意欲を削いでしまい、それが生産性をますます低めている原因にはかならないと経済的理由からも農民の自由が必要であると説得する。

彼は農民の解放を土地つきで求める。彼は『勤労と怠惰についての考察』(1789)を書きその中で、農奴制は「不注意、怠惰、狡猾」などをもたらし、社会的モラルの低下をもたらし、経済的不利益をもたらしていることを指摘し、「人々を労働に強制するのではなく、彼らに勤労にたいする愛を鼓吹しなければならない。囚人の労働者は社会にとって必要ではなく、随意的自由な労働者こそが必要なのである<sup>49)</sup>」と主張している。「ホチーロフ」において、「人間は彼の自然的意欲に従って、自分のために始めることなら何でも、強制されないものの全てを、勤勉に、精をこめてやるものである。……わが国の農民たちのところでは、畑は他人の物であり、その収穫物は彼らの物とはならない。従ってそのために畑をいい加減にしか耕さないのである<sup>50)</sup>」と述べ、その後で、「ロシアにおける奴隷制の廃止」の計画案を目覚めた君主に提出させている。それは一つは、「地主が自分の家に使役や労働のために連れてくるなら、農民は自由」を得、結婚の自由も得るとする奴婢制の廃止であり、もう一つが、「農民の所有権と保護」に関するもので、「彼らが耕作している土地の割り当て分を、彼らの所有物として有しなければならない。なぜなら彼ら自身で人頭税を支払うことになるからである。……農民に不動産を有することを、すなわち土地を購入することを許すこと。主人に賜暇のために一定の金額を支払えば、自由を何の障害もなく獲得できることを認めること。裁判なしの専断的処罰を禁止すること」とであり、これらが実現すれば「その後、奴隷の完全な廃止が続くだろう」とする農民の漸新的解放を求めたものである<sup>51)</sup>。自分の土地で働く人間の健全さと喜びを『自由』の中で「自由の精神が畑を暖め、／涙を知らず畑を瞬時に肥やす。／自ら種まく者が、自ら刈り入れる」「労働は——快樂、——汗は露、／自らの命あふれる活力で／牧場、畑、森林を実り豊かにする<sup>52)</sup>」と歌い上げている。ラジーシチェフは農民に土地私有を認めることこそが社会道德の改善と社会の経済発展の基盤となると考えていたのである。これは、人間の貪欲に悪の源を見、私有財産制の廃止を求めたマブリとは明らかに異なる。彼は反対に個人的利害関係を人間の社会生活の基礎とみなす。「貪欲」が「人間的行為の強力なる促進者<sup>53)</sup>」と呼び、個人的利害関係に社会的道德性を見、個人的利害の公平な機会の実現に社会的矛盾の解決、全体の福祉を見出そうとしたのであり、ここに彼の独自性があるが、エルヴェシウスの功利主義的思想も見えてくる。

ラジーシチェフは、目覚めた君主に改革を託しているがその可能性を期待していたとは思えない。彼が求める君主は、リュクルゴスのような存在であり、「国民社会の第一の市民」としての自覚を持つ君主である。しかし現実には君主は取り巻きの世襲貴族の手で墮落していくのが常であり、ラジーシチェフ自身「皇帝が帝位についたままで、自分の権力の何一つとして自発的に譲渡するというような例は、おそらく世界の終わりまで、ありえないであろう<sup>54)</sup>」ということを認識していた。しかしそれでも、「社会で侵された自然的平等と市民的平等」を「貴族の権利の制限」によって一定の改善をもたらそうとする。貴族は「そのはじめにおいては自身の個人的功績によって国家にとって有用であった。しかし相続制であることによって、自らの功績を色あせたものにしてしまい、それを植え付けたときの甘い根はついには苦い果実をもたらすようになって<sup>55)</sup>」しまい、「勤務に就く100人のうち、98人はなまくらなプレーボーイとなり、二人だけが年老いてから……善良な人間となるにすぎないのに、「17才で少佐、20才で大佐、21才で將軍」という特権だけを付与されているのが現状である<sup>56)</sup>。ラジーシチェフは、こうした貴族が君主に媚へつらい傲慢と虚栄の墮落の世界に導き、国家は彼らの食い物にされているとして、寄食者に墮した彼らの反省と自らのあるべき任務の自覚を促そうとする。一方、君主に対しては、彼は「権力が自由とお互いの利益に基づいてどのように結合しなければならないかの手本」を子孫に残すことを課題にしているにすぎず、彼にとって問題は貴族であり、貴族が「祖国の真の息子」となり得るかどうかにその解決を求めようとしたのである。

ラジーシチェフは、貴族の家庭の教育を、「もし乳母と後見人がいつまでもま とわり続けるなら、子供は長い期間にわたって彼らの助けを受け続け、その結果成人しても一人立ち出来ない軟弱者となってしまうだろう。お坊っちゃん育ちの青年はいつまでも坊やのまま、乳母がいなければ歩くことも出来ず、後見人がいなければ自分の財産の管理も出来ないのである<sup>57)</sup>」と批判し、自分の足で立ち、「祖国の真の息子」=市民となることを求めそしてその教育の在り方を示していく。

#### IV

ラジーシチェフの教育観は、ロック、ルソー、エルヴェシウスの影響下に形成されている。エルヴェシウスがベースであるがルソーにより多く依っている。ラジーシチェフが、「人間は善でも悪でもなく生まれてくる。……従って悪業は人間に固有のものではない。……従って人々は彼らが存在している状況に依存しているのであり、しかも経験は我々に多くの人々は奇怪な出来事の散発的合流に従っていたことを証明している。もし人間が偶然に罪人になることがあるにしても、どんな人間でも矯正されうるものである。もし彼が彼を取り巻いている者たちに服従しているなら、そしてもしも外的原因の合流が彼を誤解に導いているなら、原因を取りのぞいてやれば、ほかのことが活動をしはじめることは明白である<sup>58)</sup>」と語っているとき、ここは明らかに「環境が人間を作る」「教育は万能」であるとするエルヴェシウスを見出せる。また彼が「自然、人間、事物が人間の教師である<sup>59)</sup>」、「教育の力を認めながらも、我々は自然の力を外さない。それに従っている教育、あるいは力の発揮はまったく効果を失わない。しかしさまざまな段階の状況の中でそして

我々を取り巻いているあらゆるものの中でいつも促進しているものを利用することを学習するのは人間によっている<sup>60)</sup>」と語っているときはルソーを想起させる。彼は人間をより精神的・能動的にとらえ、教育の方法を重視している以上ルソーに依存する。「社会的理性はひたすら教育によっている。知的力の相違は人間と人間との間で大きく、そして自然から生まれついたものであると思われているけれども、しかし教育は全てをなすのである。この場合に我々の考えはエルヴェシウスとは異なっている<sup>61)</sup>」と彼は言明する。これが彼の教育の主要な原理であった。尤も彼は、「人間は共同生活のために生まれついている<sup>62)</sup>」とか、人々は「独居においては文字通り死んでいるが、社会的同居において活気づき、相互に強化され、広がり、高まっていった<sup>63)</sup>」と主張するときルソーに批判的になる。

彼は『祖国の息子と何かについての対話』の中で「祖国の息子」に定義を与え、『モスクワからペテルブルクへの旅』の「クレスチツイ」の章で田舎に住む貴族の家族を例にして具体的な教育法を示し、『人間、その死と不死について』においては認識論を展開している。

エカテリーナは「祖国の息子」として三つの義務を課した。すなわち「祖国の息子の第一の義務は、政府に関して何らの非難めいたことを語らないこと……いわんやそのような言動をしないこと」「祖国の息子の第二の義務は、服従である」「当局は、全体の幸福を最善にかつ本質的に知ることが出来かつ知らねばならない。それ故に統治者の炯眼と正義にたいして心の底から服することが祖国の息子の第三の義務である」ということである。この前文には「幸福は各人が神に命じられた職責を辛抱強く遂行すること」にあり「真の幸福は我々の内部にあるものである」従って「自分の身分や地位に満足する人々だけがこの世で幸せなのである」とする説明がなされている<sup>64)</sup>。もっともこれは主として都市住民に予定された国民学校に配布されたもので、実はラジーシチェフがはたして読んでいたかどうかになると疑問である。それは、彼が農民も含め国民大衆の教育に直接言及していないこと、まして彼がノヴィコフのように広く国民大衆の啓蒙活動に従事していないこと、また「祖国の息子」という言葉は「愛国者」という意味で広く使われていたと思われ、彼もその言葉を使っていたと考えられること、によるが、取りあえずその詮索はここではやらないことにする。ラジーシチェフは「祖国の真の息子」という「真の」という言葉に力点を置いているが、エカテリーナも同じ言葉を用いており、これはともにより高い道徳性をこめた「真の愛国者」という意味では同じであるが、そこで意味する内容が対立的であるという点で比較すると、ラジーシチェフは「真の人間」を意味し、エカテリーナは忠良なる「臣民」を意味した。

さて『祖国の息子とは何かについての対話』の中で、ラジーシチェフは「祖国に生まれた者の全てが、祖国の息子（愛国者）の偉大な名に値するわけでは<sup>65)</sup>」なく、「人間、人間が祖国の息子の名を帯びるために求められるのだ！<sup>66)</sup>」とするが、「しかし彼は何処に？何処で、この偉大なる名に相応しく飾られるだろうか？<sup>67)</sup>」と問いを投げかける。彼は、人間の本性と心の中で描かれている理性の声、法の声は、計算される平均像の人々を祖国の息子と呼ぶことに同意しはしないのではないか！<sup>68)</sup>」と、そこに高い道徳性を求めた。そしてそれは人間が本来有する自由によってなしうると考えられる。彼は言う。「周知の

ように、人間は、知性、理性ならびに自由な意志を授けられているがゆえに、自由な存在である。彼の自由は最善のものを選び取ることにあり、これら最善のものを彼は理性を用いて認識し選び出し、知性の助けをかりて理解し、そしていつも美しきもの、偉大なるもの、気高きものを志向するのである<sup>69)</sup>」と。しかしロシアの現実社会では、農民・農奴は自由を有しないために人間としての存在を失い、地主・貴族は自由を有するが他人の不幸・犠牲によって自分の利害だけを追い求めていることによって人間としての資格を欠いている。それでもラジーシチェフは夢のなかに作り上げた理想の君主に期待するのではなく、自由を有している地主・貴族に「祖国の息子」の可能性を見ようとしたのであった。彼は、「人間は如何にどれほどの背徳的であろうと、また自身に惑わされていようとも、正しさと現象や物体の美しさを少しも感じないなどという者はいないのである<sup>70)</sup>」ことに期待する。

ラジーシチェフは「祖国の真の息子」としての資質として3つあげる。「名誉」と「善行」そして「高潔」である。「彼は名誉を愛する。それがなければ彼は魂がないのと同じである」と「名誉」を最も重んじる。「名誉」を求めるのは、自分の名誉欲をいたずらに充たそうとするためのものではなく、他人の愛と自分の良心の内的満足のためのものでなければならぬ。「名誉への熱烈な愛そして他人からの好意と称賛とで自分の良心の慰めを得ようとする願望が最大のかつ最も確実な手段で、それがなければ人間の幸福も完成もありえない」とし、さらに「名誉」は「神の愛願や同僚の愛を得るための力と美を自身にもたらそうとする生まれ持つ燃えるような意欲」によってもたらされ、それは「この世で最も偉大な原動力の一つであるとする。彼は「名誉」を重んじそのために生き抜く人が「真の人間」であり、従って「真の人間と祖国の息子とは同じである」とみなした<sup>71)</sup>。

「善行」は「自然の法と祖国の法を全力を尽くして守りぬくこと」にその身を捧げることであり、「彼の死が祖国に偉大さと名誉をもたらすということ信じると、その身を犠牲にすることを怖れてはならない」と言い切る<sup>72)</sup>。

「高潔」については、「すばらしき賢明さと博愛心に富む性質と自分の行為によって自らを為す人が高潔である。理性と徳によって社会の中で輝く人が高潔である」と説明している。「高潔な人」は「ただ祖国の名を聞いただけで愛情のこもった喜びで胸を踊らし、……祖国の福祉のために全てを犠牲にする<sup>73)</sup>」人である。

これがラジーシチェフの「祖国の真の息子」ということになる。ここにみられる人間の自由と高い社会道徳性の追求はエカテリーナの忠良なる臣民とは対立するものであるが、抽象的で道徳論そのもので、この「祖国の息子」にそのまま革命の「闘士」を見出すことは出来ない。

ラジーシチェフの「祖国の息子」の教育論といえるのが『ペテルブルクからモスクワへの旅』の「クレスチッツイ」の章であるが、それは農村に住む貴族の父親が自分の子供達に施してきた教育を旅人に物語る形をとっており、ロックとルソーの家庭教育論を想起させる。

父親は、家庭教師を雇わず、自ら教育にあたる。それは「雇いの教育者はお前たちの身体に関わることはないし、また雇われ教師はお前たちの心にも理性にも触れることは全くない」からである<sup>74)</sup>。父親は「お前たちを生んで、私はお前たちにたいして多くの義務を

有した。しかしお前たちは私に何の義務も有してはいない。私はお前たちに友情と愛情とを求めているだけである<sup>76)</sup>」; また「私は、臆病あるいは隷属がお前たちにとって自分の運命の辛さをほんの少しでも意味するようになることを望まなかった。そしてそのためにはお前たちの精神が無分別な命令を容認することなく、友情の助言に従うようになることである<sup>76)</sup>」とその教育方針を語る。

父親の教育はエミールのように進められ、出来るだけ自然の歩みに従い、その手を控える。「お前たちのうちに存在している未熟さのために、私が定めた道から外れ、偶然的出来事によって方向が変わってしまっていると私が気がついたときには、私はお前たちの歩みを止め、あるいはより適切に言えば、あたかも砦を決壊させた急流が巧みな手で元の岸に向かっていくように、元の道にそっと導いてやった。おどおどした優しさは私にはなかった。自然や天候の悪意からお前たちを守ることをしなかったと思ったかもしれない」という<sup>77)</sup>。子供達は、自然の生活の中で遊びや労働を通じて、身体や感覚の訓練をする。彼らは「しばしば無帽子で、素足で歩き回り、泥や誇りにまみれ、ベンチや石の上で寝た」りした。彼らは「速く歩くこと、泳ぐこと、苦もなく重いものを持ち上げること」ができ、「鋤を使うこと、畝を耕すこと」「大鎌と斧、カンナとのみを巧みに使いこなすこと」を学び、「シチューや粥を煮ることも肉を上手に焼くこと」も出来るようになった。さらには乗馬と剣術と射撃の訓練も受けたのであった<sup>78)</sup>。

父親は息子たちに、『我々の労働が、食事の最良の調味料であった。我々が村でどれほど満足をもって食事をしたかを思い出してみよ。……そのときの黒ぼんと田舎クワスのなんとも美味かったことか。

上品ぶった立ち居振る舞いをしないこと、慣習や流行が如何に命じるかにではなく、お前たちの身体にどれほど快適に価値を置くことである。センスのない着こなしをしていることや、髪の毛が理髪師の手によってではなく、自然の手によって縮れ上がっていることを嘲られるからといってそんなことに不平を言ってはならない。パーティーに、ことに御婦人からの誘いに出掛けることを怠り、そのために彼女たちの美しさを誉めてやれないからといって不平を言ってはならない。……あなたは道化役者のように巧みに話せないことを悲しんではならない」と自分の教育の利点を上げ、彼らの不満をさす<sup>79)</sup>。

ラジーシチェフは経験や感覚による教育を人間の認識そして思考の基とする。彼は「経験は一切の自然的認識の基礎である<sup>80)</sup>」といい、また「あなたの理性はその始まりをあなたの指のなかに持っている。……もし私を信じないならば、ロックを読んでください。彼はあなたの全ての考え、最も抽象的な考えも、あなたの感覚のなかにその始まりを有していると言って、あなたを驚かすことでしょう」と言う<sup>81)</sup>。しかしエルヴェシウスの機械論的な感覚論には同調せず、「エルヴェシウスは、手が人間にとって理性への道案内人である、とためらいもなく確信した。……しかし人間のうちにあるこれらの触覚の美的感情は、ただひとつ手の指に制限されてはいない<sup>82)</sup>」「理性の全ての行為は単純な感覚にほかならないとする、エルヴェシウスの論証は全くのまがい物である。……我々の感覚の観察は我々に感覚からの思考は個々別々の何かであることを教える。……つまり感じることあるいは物体の我々の感覚への打撃は我々の思考の概念作用とは異なっている<sup>83)</sup>」と、反論

している。

彼は、「人間は物質について知る力を有している。彼は認識の力を有しており、それは人間が認識していないときにも存在し得るものであることは、当然である。物質の存在は、それらについての認識の力に関係なく、それ自体に応じて存在しているということである<sup>84)</sup>」、「物質の特性を打ち砕いても、それでもそれは全く消えてなくなることはなく、またそれ自体によって影や幻となることもないのである<sup>85)</sup>」、「どのような存在かを心に描くために、それに必要な第一のものは実在である、なんとなればこれが無ければそれについての思考も存在できないからである。それに必要な第二のものは時間である。……それに必要な第三のものは空間である。……何となれば我々の認識は物質の実在を知ることにおいて、空間と時間のなかにおいてのみある<sup>86)</sup>」からであると、唯物論的認識に立ち、その認識論を次のように展開している。「我々は物質を二重に認識する。第一は、物質が認識の力の中で生み出す変化を認識し、第二は、認識の力の法則と物質の法則との結合を認識する。第一を経験と呼び、第二を判断と呼ぶ。経験は二重に起こる。第一は、認識の力が感覚によって物質を認識するのだから、感性と呼び、その中で生み出される変化を感覚的経験と呼ぶ、第二は、物質の関係の互いの間での認識を理性と名づける、我々の理性の諸変化についての知識が理性的経験である。

記憶の助けを借りて我々は感性の経験された変化について想起こす。経験された感覚についての知識を心象（イメージ）と呼ぶ。

物質の互いのあいだの関係によって生み出される我々の概念の変化を思考と呼ぶ。感性が理性とは違うように、心象（イメージ）は思考とは異なっている。

我々は、物質の存在を、それからの我々の理解の力における変化を体験しなくても、ときどき認識するのである。これを我々は判断と名づけた。この能力に関して認識の力を知性あるいは分別と呼ぶ。つまり判断は知性あるいは分別の利用である。

判断は経験への追加分にはかならず、そして経験を通して以上に他の方法で物質を確かめることは決して出来ないのである。

これこそ人間における知的能力の簡潔な表現である。しかし我々の認識の力の種類はその存在の中で異なっているのではなく、それは一つのものでありかつ又分けられないものなのである」と、また「我々は類似していることによって最もよく確信するということが、我々の最も通常の判断はそれに基礎を有しているということを知らない者がいるであろうか」と<sup>87)</sup>。

クレスチツイの貴族は、息子たちに身体や感覚の訓練と並んでさまざまな科学の知識教育も行なうが、とりわけ言語の学習に力を注ぎ、ロシア語はもとより外国語——英語、ラテン語や他の言語——を教える。もちろんそれは「理解しえないような言葉や規則で頭を満たす」ことのためではない。ラジーシチェフは「教養の入り口は言語の認識<sup>88)</sup>」であるとし、言語の学習によって思考の幅をより広げることが求め、「言葉は、思考を一つに集める手段であり、それを人間があらゆる自分の工夫や自分の完成にたいする援助としなければならない。かくも小さき道具一言語—は人間の内にあるもの全ての創造者と思われるほどである。……つまり言葉は、人間の内にある思考する力を広げ、それ自体の行為のもとで

それらを知覚しそしてほとんど全能の表現となる」と主張している<sup>89)</sup>。クレスチツイの貴族は息子たちに「それによってお前たちの考えを言葉でそして文字で説明できるようにしなさい、その説明がお前たちの中で、自然であり、冷汗を流すようなこじつけとならないようにしなさい。……言葉を自由に操り表現し、その自由の精神は理性を堅固な概念に、どんな場合にも必要な概念作用を自在にしてくれるのである<sup>90)</sup>」とその重要性を説く。

クレスチツイの貴族はさらに息子たちに絵画と音楽の教育も施し、「絵画のなかに感情だけでなく、理性の慰め」を見出し、「音楽はまどろんでいる心に刺激を与え、……我々のうちに温厚さを習慣にして」くれるものであるとその意義を説明する<sup>91)</sup>。

こうして彼は多方面の教育を施すが、その目的は自立と社会道徳性の形成にはほかならない。彼は、剣術の修業も労働も精神の鍛練、社会性の高揚を目的とする。彼は言う。「私はお前たちに剣で闘う残忍な技を教えた。しかしこの技が自分の身を守らざるをえなくなるまでお前たちの中に役に立たないままにしておく。それがお前たちを厚顔にしなくなることを期待している。何となれば、お前たちは強い精神を有することになり、たとえロバが後足でお前たちを蹴ろうとも、あるいは豚が悪臭を発しながら鼻ずらをすり寄せてこようとも、それらを侮辱だとみなすことはないであろうからである。お前たちが牛の乳を搾ることが出来ることを……誰に話しても恥じることなどないのである。自分で何かをすることができ、他人にもやらせることが出来るし、その上何事もやり遂げるには多々の困難が伴うことをよく知っているので、過ちにたいしても寛大であることが出来るのだ」と<sup>92)</sup>。「思いやり」は人間の重要な徳性の一つである。「動作の訓練が体力を強化するように、思考の訓練が思慮分別の力を強化するように、思いやりの訓練は善行の基盤を強化する」からである<sup>93)</sup>。子供達に「堀にはまり込んだ荷馬車を持ち上げてやるなど、手助けをし、そして倒れている者を安心させてやることを嫌がらないようにせよ。手、足、また身体を汚せ、しかし心は強化せよ。あばら屋に行き赤貧に苦しむ者たちを慰めよ、彼らに食物を与えよ。そうすればお前たちの心も、悲しみにくれる者たちに慰めを与え、慰められるだろう」と教える<sup>94)</sup>。「自己を抑制すること、節度あること」も同様に重要である。「心で励み、温厚、感受性、仁慈、寛大に務めよ、そうすればお前たちの欲望は善事に向かっていくことであろう。理性で励み、読書、熟考、あるいは諸事の探究に務めよ、そうすればお前たちの意志と情熱で理性を制御できるようになるだろう。……欲望の根源は気紛であり、そして本性それ自体による我々の多感な性質に基づいている。……かくて、欲望において節度あることが善事である。つまり道の真ん中を歩むことが必要である。欲望において過度であることは破滅となる。無欲であることは精神的な死となる<sup>95)</sup>」と説く。こうして道徳性は自己の良心への問いかけ、自己認識の高まりそして自我の確立の自己検証によってさらに仕上げられていく。「何にもましてお前たちの全ての行為にたいして自分自身の尊敬を勝ち得るように努力せよ。一人になって自分の視線を自分の内奥に向けて、お前たちがやった行為にたいして後悔することがないようにせよ、自分自身をいつも見つめよ」と父親は息子たちにさとし<sup>96)</sup>、そして「法律あるいは君主、もしくは地上のなんらかの権力がお前たちに不正や徳の破滅へ向かわせようとすることがあっても、嘲りも責め苦も苦痛も流刑も、さらには死そのものをも怖れることなく、毅然としていよ、自分自身の良

心を断固として堅持せよ。激動する力が弱き波濤の中に立つ巖のごとくに。圧迫者の激怒はお前たちの堅固さにあっては砕け去ってしまうであろう。もし彼らがお前たちを死に至らしめるならば、彼らは永遠に嘲笑され、お前たちは気高き精神を持つ人々の記憶に永遠に残るであろう<sup>97)</sup>」と、社会正義を貫き、それにその身をも捧げることに男子の本懐を見出すことを求めた。

これがラジーシチェフの「祖国の息子」の像であった。それは何よりも高い道徳性を地主・貴族に求めたものであり、それが人間のあるべき姿である。彼が「国民大衆が教化されるだけでは十分ではない、国民大衆が勤勉さを持つことが必要である。それがなければ、ただたんに国民大衆が教化されるだけでは無知であることよりもはるかに有害となる。何故ならば、無為の無学者は、なんらかの知識を有している怠惰者よりも、悪業においてうまくやることはるかに少ないからである<sup>98)</sup>」というときも、また「もし社会的徳、高潔への我々の魂が人間愛の堅固さのなかに自己の基盤を有しているなら、その時代にその輝きがより<sup>99)</sup>」大きく増すであろうと言うときも、彼は社会はモラルによってこそ保たれることを願望していたのであった。

しかしながら、彼は自分の訴えが早急に行なわれなければ、地主・貴族が自身の虐待、搾取、徒食、怠惰の悪業悪徳を即刻反省し、自身の為すべき役割を自覚し、「祖国の息子」の教育に自ら真剣に取り組まなければ、国民大衆・農民たちの自然権＝「自然の復讐権」が行使されることを警告したのであった。「おお！ もし、重き軛に苦しめられていた奴隷たちが、絶望のあまり荒れ狂い、おのが自由を妨げる鉄鎖をもって我々の頭を、無常なる主人どもの頭を打ち砕き、我々の血潮でおのが畑を浸したとしても！ 国家はそれによって何を失うというのだろうか？<sup>100)</sup>」と、叫ぶ。だが彼の警告に地主・貴族たちが応えてくれるとも思えない。彼は偉大なる救い主の出現と革命を予言することによって自らの論理を貫いた。『モスクワからペテルブルクへの旅』の中で「間もなく、虐げられた人々を救う偉大なる人々が、彼らの中から現われるに違いない。しかもこの人々は、自分の使命をよく心得ていて、圧政の権利を帯びることはないだろう。これは空想などではないのである。眼差しは、我々の目から未来を覆い隠している時間という厚き張を突き抜いているのだ。私はまる一世紀も先を見ているのだ<sup>101)</sup>」と。『自由』の中で「巨大なる廃墟の内部から、／火の海、血の川の中から、／飢え、残忍、暗黒の諸悪の中から、／権力の血に飢えた魂を目覚めさせた、一／数々の小さき光放つものたちが生まれた。／自らの船を揺るぎなく／友情の花冠で飾り、／全ての民の利益に船を向け、／そして飢えたる狼どもを押し殺す、／おのが父親を盲人とみなしたものどもを。／……／しかし、まだ時は来たらず、／天命が下されず。／遠き、遠き未来に終わる、／その時こそ一切の不幸と苦難が終わる」と<sup>102)</sup>。

ラジーシチェフは、1792年にヴォロンツォフの弟で友人のアレクサンドルに次のように書き送っている。「私はあなたに持てる階級と持たざる階級との間の死を賭したこの闘いを語った。そして前者はるかに少数であるので、結局のところ彼らは敗北するにちがいない。伝染病は至る所に広がるだろう、我々が遠くにあることが我々を暫くは予防してくれるだろう。我々は最後になるだろう。——しかし我々もこの疫病の犠牲になるだろう。あなたも私も、それを見ることはないだろうが、しかしわたしの息子は見るだろう。私は、

鍛冶工とか指物師とかなんらかの手工を彼に教えるうに決めた。彼の召使たちが、彼がもはや彼らを必要ではなく、彼らは彼の土地を互いに分けることを要求するときには、彼が少なくとも自身の労働でパンを稼ぎ出すことが出来るようにしてやるだろう。そうすればペンザあるいはドミートロフの来るべき都市自治体の一員となる名誉を得るだろう<sup>103)</sup>と。彼は「革命のモラル」よりも「人間のモラル」を追い求めた目覚めた貴族であり、ロシア・インテリゲンツィアの典型であった。

## 註

- 1) 川端香男里 米川哲雄 訳 プーシキン全集 5 河出書房新社 1973 504頁
- 2) 同上
- 3) 同上 128~135頁
- 4) 渋谷一郎はこれらの研究を次のように要約している。「エカテリーナ二世の『勅命』が提出する諸理想に熱中したラジーンチェフは、公然たる直接的方法をとってツァーリの良心に訴えようと望み、ロシアの農奴制的現実の暗黒な場面を『旅』の中で描いたのである。ツァーリ権力を啓蒙しようとし、……彼は自分の『未来の計画』を提出することにより、社会悪の手段を指摘したのである。ツァーリの発意と地主たち自身の同意による上からの漸進的な農民解放の予見を特筆すべきである。」(渋谷一郎 ラジーンチェフの思想をめぐる論争点—歴史的な概観—明治学院大学『経済研究』 No. 19 p. 115
- 5) Г. В. Плеханов, т. XXII, гл. XIII, стр. 333
- 6) В. И. Ленин—«О национальной гордости великороссов», Собр., соч., т. XVIII, стр. 81
- 7) ニコライ・ベルジャエフ 田口貞夫 訳 ロシア思想史 ベリかん社 昭和49年 34頁
- 8) 参照 前掲書 ラジーンチェフをめぐる論争点 渋谷は、ラジーンチェフは、1. 革命理論と、「啓蒙的絶対主義」理論を「組合せた」革命家にしてかつリベラル、2. エカテリーナ二世の見せかけのリベラリズムを暴露し、同時代人たちのリベラルな幻想を批判した確信ある革命思想家、のふたつ見解があるとしている
- 9) Ред. В. Е. Евграфов, История Философии в СССР 2, 1968, стр. 101
- 10) Ред. И. Я. Щипанов, А. Н. Радищев Избранные философские сочинения, 1949, стр. 19~20
- 11) コンスタンチーノフ監修 勝田昌二 他訳 世界教育史 青銅社 1954 201頁
- 12) Ред. М. Ф. Шабаева, Очерки истории школы и педагогической мысли народов СССР—XVIIIв.~первая половина XIXв., 1973, стр. 181
- 13) ノヴィコフについては、拙稿 『エヌ・イ・ノヴィコフの市民教育論』 横浜国立大学教育紀要 No. 27 1987 p. 12~44 を参照
- 14) Александр Николаевич Радищев, Избранное., 1976, стр. 66
- 15) 前掲書 世界教育史 203頁
- 16) М. Муратов, Жизнь Радищева, 1949, стр. 16
- 17) Там же стр. 62
- 18) В. М. Горохов, А. Н. Радищев о воспитании и образовании, «Советская Педагогика» 1939, № 11-12, стр. 105
- 19) Там же, Жизнь Радищева, стр. 70
- 20) Там же, стр. 63~65
- 21) Там же, стр. 74
- 22) 渋谷一郎 ライプツィヒ大学でのラジーンチェフ 明治学院大学『経済研究』 No. 3 16頁 Lang. D. M. は、「The first Russian radical」(1977)の中で「ウシヤコフはベンサムとジェームス・ミルの著作に数十年先行していたといえる」(p. 57)と書いている
- 23) А. Н. Радищев, Путешествие из Петербурга в Москву, 1971, стр. 166

- 24) 前掲書 プーシキン全集5 129頁
- 25) Там же, Жизнь Радищев, стр. 89
- 26) Там же
- 27) 哲学事典 平凡社 1983 1335頁
- 28) リシュタンベルシェ 野沢協訳 18世紀社会主義 法政大学出版局 1981 194頁
- 29) 相田重夫 帝政ロシアの光と影 三省堂 1983 168頁
- 30) Г. Макогониченко, Николай Новиков и русское просвещение XVIII века, 1951, стр. 384
- 31) Там же, Путешествие ....., стр. 167
- 32) Там же, стр. 93
- 33) О человеке, о его смертности и бессмертии, Там же, А. Н. Радищев Избранные ....., стр. 296
- 34) Там же, Путешествие ....., стр. 127
- 35) Там же, Александр Николаевич ....., стр. 62
- 36) Там же, Путешествие ....., стр. 48~49
- 37) Там же, стр. 189
- 38) Там же, Александр Николаевич ....., стр. 62
- 39) Там же, Путешествие ....., стр. 128
- 40) Там же, стр. 127
- 41) Там же, стр. 130
- 42) Там же, стр. 50
- 43) Там же, стр. 93~94
- 44) Там же, стр. 286~207
- 45) Там же, стр. 197
- 46) Там же, стр. 126
- 47) Там же
- 48) Там же, стр. 132
- 49) Там же, Очерки истории школы и ....., стр. 186
- 50) Там же, Путешествие ....., стр. 131~132
- 51) Там же, стр. 135
- 52) Там же, стр. 213
- 53) Там же, История философии ....., стр. 128
- 54) Там же, Александр Николаевич ....., стр. 30
- 55) Там же, Путешествие ....., стр. 139
- 56) Там же, стр. 97
- 57) Там же, стр. 143
- 58) Там же, А. Н. Радищев о воспитании ....., стр. 111
- 59) Там же, О человеке, о ....., стр. 384
- 60) Там же, стр. 308
- 61) Там же, стр. 305
- 62) Там же, стр. 296
- 63) Там же, История философии ....., стр. 104
- 64) Хрестоматия по истории СССР XVIIIв., 1963, стр. 582~584
- 65) Там же, Александр Николаевич ....., стр. 61
- 66) Там же, стр. 62
- 67) Там же, стр. 61
- 68) Там же, стр. 64
- 69) Там же, стр. 61
- 70) Там же, стр. 65
- 71) Там же, стр. 66

- 72) Там же, стр. 67
- 73) Там же
- 74) Там же, Путешествие ....., стр. 99
- 75) Там же, стр. 101
- 76) Там же
- 77) Там же
- 78) Там же, стр. 101~102
- 79) Там же
- 80) Там же, О человеке, о ....., стр. 287
- 81) Там же, стр. 338
- 82) Там же, стр. 288
- 83) Там же, стр. 365
- 84) Там же, стр. 298
- 85) Там же, стр. 324
- 86) Там же, стр. 320
- 87) Там же, стр. 299
- 88) Там же, стр. 391
- 89) Там же, стр. 290
- 90) Там же, Путешествие ....., стр. 103
- 91) Там же, 102
- 92) Там же
- 93) Там же, О человеке, о ....., стр. 400
- 94) Там же, Путешествие ....., стр. 105
- 95) Там же
- 96) Там же, стр. 108
- 97) Там же, стр. 107
- 98) Там же, Очерки истории школю и ....., стр. 185
- 99) Там же
- 100) Там же, Путешествие ....., стр. 179
- 101) Там же
- 102) Там же, стр. 229
- 103) Там же, А. Н. Радищев о воспитании ....., стр. 104